

満蒙開拓団とは

参考：中学校歴史教科書
日本歴史大事典
愛知県開拓史

○ 背景

昭和初期、日本の農村は経済不況が続き、特に1929年(昭4)の世界恐慌で疲弊し、零細規模のうえ多くの人口を抱えるなど、深刻な問題となりました。その人口対策として中南米(特にブラジル)移住が奨励され、昭和元年～9年に14万人(愛知県2,824人)が送出されましたが、根本的な解決策とはなりません。このようなとき、満州国が建設され(昭7年)、日本の勢力が確立すると、満州への日本人移住は、軍事面、農村対策として大きな期待が寄せられることになりました。

○ 国策満州移民の開始

政府は1932年(昭7)から試験的に農業移民を募集、1700余名を送出しました。その結果、大量移民の送出が可能と考え、満州移民を重要国策として取りあげた。そして1936年(昭11)、20年間で500万人の移民計画を発表。しかし、1937年(昭12)日中戦争が始まり、計画の達成が難しくなったため、1938年(昭13)から15～18歳の少年で組織する満蒙開拓青少年義勇軍12万人の送出が計画されました。

○ 満蒙開拓団とは

1931年(昭6)の満州事変から1945年(昭20)の終戦に至るまで、旧「満州国」に、満州支配の一環として実施した国策移民のことをいいます。1932年(昭7)から本格的に実施され、1945年までに満蒙開拓青少年義勇軍10万人を含む、およそ32万人が満蒙開拓移民として送り出されました。

満州に行けば20町歩(約20ha)の地主になれるといった宣伝や、満蒙開拓青少年義勇軍参加への教師による指導などもあり、農家の二・三男や貧しい農家の多くが満州へ渡りました。長野県からは、約3万8千人が渡りました。

開拓団および義勇軍送出者数

順位	県名	開拓団員	義勇軍	計
1	長野	31,264	6,595	37,859
2	山形	13,252	3,925	17,177
3	熊本	9,979	2,701	12,680
4	福島	9,576	3,097	12,673
5	新潟	9,361	3,290	12,651
43	愛知	634	1,724	2,358
	全国計	220,359	101,514	321,873

愛知県開拓史 通史編より

移民をした人々が入植した土地の大部分は、現地の人々の農地を安い値段で買い上げたものでした。肥料もいらないほどの肥えた土地に、現地の人（土地を失った農民も）を雇って農業にはげみました。

やがて農地が不足してくると、防衛も兼ねてソ連との国境に近い未開墾のところへと開拓を広げました。開拓地で



乗船する開拓移民 夏目幾世氏：満蒙開拓の歩みより

は、出身の村や郡単位でまとまって開拓団を組織し、共同で農業に取り組んで、軍への食糧を提供しました。また、独身男性の開拓団員の結婚相手として、独身女性も満州へ渡り、現地で結婚して家族を持つことも増えました。彼女たちは「大陸の花嫁」とよばれました。

しかし、日中戦争から太平洋戦争に入ると、満州を守る関東軍の多くが南方戦線に移動させられ、それを補うために開拓団の男性も軍隊に召集されました。そのため、開拓団には女性や幼い子ども、老人が多くなり、満州での農業経営も苦しくなっていました。

1945年（昭20）8月9日、ソ連が日ソ不可侵条約を無視し、満州へ侵攻を開始しました。ほとんど抵抗されることなく南下しました。関東軍はいち早く満州の防衛を放棄し、司令部は移転していました。同年5月には満州国の4分の3を放棄、朝鮮国境近くに軍司令部を移動させていたのです。そのことは、開拓団の人たちには知らされていませんでした。

8月15日終戦、満州国は消滅しました。残された開拓民はじめ満州にいた多くの住民は、軍に見捨てられ、日本に見捨てられたのでした。頼れるものは何もなく、ただ日本に帰ることだけをめざしました。恨みをかっていた中国人の襲撃とソ連軍から逃れる過酷な逃避行が始まるのです。男性の開拓員を根こそぎ召集され、老人、女性、子どもだけになった開拓民の逃避行は、世界に類を見ない悲惨な逃避行だったとされます。

逃避行中の病死、中国人の農民、満軍、ソ連兵による襲撃、掠奪、銃殺、暴行、自決、戦死など多くの苦しみに翻弄されることになりました。

開拓団の犠牲者も多く、約半数の人たちが帰国できませんでした。こうしたことにより、肉親と生き別れて中国人に養育された中国残留日本人孤児が生まれることになりました。